

朝比奈隆と日本の西洋音楽受容

—聴衆の「西洋音楽観」との関連から—

北澤 隆 明

(本講座大学院博士課程後期在学)

はじめに

朝比奈隆(1908-2001)は、日本を代表する指揮者として評価される人物である。晩年の華々しい活動は記憶に新しいが、彼が生前残した多くの録音や著作、テレビやラジオなどのマスメディアにおける活動などからも、その業績をうかがい知ることができる。

筆者はこれまで、戦後日本における朝比奈の活動と、1960、70年代のマスメディアの普及との関連に注目した言及を行ってきた(北澤 2004)。彼は60年以降、積極的に録音活動に携わり、SP, LP, CDと映像(LDやDVDなど)の録音・録画は、2003年現在の調査で158種類にものぼる(宮岡 1997, 下田 2003)。とくにベートーヴェンの交響曲の全曲演奏を7回録音し、「世界記録保持者」として知られているという事実や(小石 1997: 118)、ブルックナーの交響曲全集を3回も録音しているという事実は(宮岡 前掲, 下田 前掲)、わが国の西洋音楽受容との関わりを考えた時、けっして見過ごされるべきものではないと考えられる。また朝比奈は生前、録音活動以外のマスメディアにも頻繁に登場しており、テレビの音楽番組や音楽誌の企画、著作出版などにおいて多くの特集が設けられた。とくに80年以降にその傾向がみられ、音楽誌の特集には7回の登場がある*1。また彼に関する書籍についても80年を境に発刊数が増えており、晩年にはテレビ番組でも頻繁に特集が組まれるようにもなった*2。

90年以降には、CDの発売・普及もあって、新たなレコード会社が録音活動に参入し、彼のあらゆるコンサートをライブ・レコーディングするようになっていく(宮岡 前掲, 下田 前掲)。また彼のそれまでのLP録音も相次いでCD化されたり、DVDとして映像化されたりし(宮岡 前掲, 北澤 前掲: 71-72)、彼が亡くなった2002年以降も、その傾向は継続している(宮岡 前掲, 北澤 前掲)。1978年には、彼の指揮するベートーヴェン全集が、「クラシック音楽」のレコードの中では異例の売り上げを記録したという言及もあるように(響 1985: 124-127)、朝比奈が聴衆の間で高い評価や人気を得ていたことも、彼のマスメディアにおける活動と無関係ではないと思われる。上述した彼に関する著書や、音楽誌などの記述においても、評論家や専門家のみならず、著名人や一般の聴衆が、彼の演奏に対して高い評価を与えている*3。

以上のような事実からは、朝比奈がマスメディアにおける活動に積極的であり、戦後日本の西洋音楽受容のプロセスと関わりが深い人物であったという推論が可能となる。それはもちろん単に「マスメディアの普及と音楽の受容」といった単純な図式で描かれるべきものではない。朝比奈隆や、彼をとりまく聴衆の活動も、当時の日本の社会史的・文化史的コンテクストの変遷と、そこにおけるメディア形成のプロセスの中に存在してきたということなのである*4。

逆に言えば、朝比奈隆という人物が抱いてきた音楽観や認識を明らかにし、彼の活動を社会史的に再評価することによって、朝比奈の活動が、日本の西洋音楽受容のコンテクストにおいて、どのような意味を持ってきたのかを知る手がかりが得られると考えられる。もちろん、そこでは「多くの聴衆が、朝比奈の

*1 『音楽芸術』『音楽の友』『レコード芸術』音楽之友社、および『音楽現代』芸術現代社における2002年までの記事。

*2 筆者が確認しただけでも、80年以降に放映された特集番組は34回にのぼる(北澤 2004: 69-70)。

*3 後述のように、彼の演奏の評価は、評論家や愛好家の間で高い評価を得ている。

*4 この論点は、北澤(2004: 11-16)で詳述した。

活動のどこに魅力を感じ、支持してきたのか」という聴衆の側からの受容活動に注目することも不可欠となるだろう。

本論では、こうした視点に留意し、彼が生前残した記述や、インタビュー企画における言説などに注目した分析を行う。そしてまた、彼の演奏を愛好した聴衆の言説についても、可能な限り収集し、考察を加えてみたい。

1. 精神主義

朝比奈隆は、93歳で亡くなるまで「生涯現役」の指揮者だった。彼の最期の録音は、亡くなる3ヶ月前の公演のものであり、この録音はCDとして発売されているほか(OVCL-00073)、テレビ番組、「終わりになき青春—若獅子と朝比奈隆^{*5}」の中でも放映されている。

そこでは狂言師、茂山宗彦・逸平兄弟が出演し、日本の伝統芸能と「クラシック音楽」をシンクロナイズさせた番組構成の中で司会進行を担う。彼らはその中で、「高い山をのぼるように険しい」芸能の世界の厳しさを説き、「九十歳を過ぎても現役である」朝比奈隆の活動に対する評価をクロスさせて、敬意を表するのである。

日本の伝統芸能と西洋音楽を重ね合わせるといふ演出に、いささかの不自然を感じないでもないが、もっとも、朝比奈自身も生前、「クラシック音楽も芸能のひとつである」という趣旨の認識を抱いていたようである。それはたとえば彼のインタビュー記事における次のような言説からうかがい知ることができるだろう。

「問題は、ただうまいだけじゃどうにもならんということです。音楽の常識や知識みたいなものは、たしかに僕らの頃より上っているのでしょうが、知識と技術だけではないでしょう。歌舞伎なんかでも、芸達者なそつのない役者はふえてきたが、かれらだけの時代が来たときに、ちゃんと芝居ができるんだらうかって、かつての名優たちは言っていましたね。その辺が芸事の難しさですね。」(藤田1997: 36)

彼は、ここで「指揮者コンクールで第一位になったのが、もうゴールに入ったつもり」になっている、昨今の若い指揮者に対して苦言を呈している。「うまいだけじゃどうにもならん」といった、技術主義への反発ともとれる言説は、たとえば、彼のインタビューをまとめた著書においても、「やっぱり、綺麗とか、きたないとか言うよりも、一人一人がむきになって、力いっぱいやってるってのは、これは、ひとつの魅力ですよね」(響 前掲: 20)という形で表現されている。彼が重要だと考えていたのは、「うまく弾くこと」ではなく、ひたむきに情熱を傾けて演奏に取り組む姿勢の方なのである。

そして彼は、西洋芸術音楽を演奏するという行為を「伝統芸能の伝承」のように捉え、「長年に渡る熟練こそが、優れた演奏を生み出すのだ」という世界を導こうとする。生前彼がよく口にした言葉、「一日でも長く生きて、一回でも多く舞台に立て^{*6}」という言葉は、まさに彼の「音楽と精神」の関わりに対する認識を象徴的に示したものだといえるだろう。

こうした認識は、朝比奈自身のみならず、彼の活動を支持する聴衆の間にも共有されてきた。本節の初めに挙げた「若獅子」の例のみならず、たとえば、2000年に放映された「朝比奈隆 今この山に登る^{*7}」というテレビ番組の中でも、上方落語界の大御所、桂米朝がナレーションを務め、「われわれ芸能の世界は螺旋を描くように、少しずつでも上昇していかなければならない。年を経るごとにだんだん下へ下がっていく人もいるが、朝比奈先生はけっしてそんなことはありません」という主旨のコメントが述べられている。また、音楽評論家の宇野功芳は、朝比奈の演奏を評価して次のように述べる。

*5 2002年1月3日に朝日放送で放映された。

*6 上で触れた番組ほか、1996年8月5日にNHK総合テレビで放映された「87歳のアメリカデビュー—朝比奈隆・シカゴ響を振る」など、マスメディアにおいて朝比奈隆が語られる際には、頻繁に引用される言説であった。

*7 2000年1月3日に朝日放送で放映された。

「人柄が音楽に現れてますね、誠実さが。素晴らしい誠実さですよ。そして暖かさ。それからやっぱり大変な情熱の人だと思いますね。そういうものが現れてますよ。人間的なスケールの大きさね。これが現れてますね。」(響 前掲：184)

また、97年に発刊された『朝比奈隆 栄光の軌跡』という書籍には、「朝比奈隆へのオマージュ」と題された特集があり、評論家や著名人が朝比奈隆に対して綴った文章が掲載されている。そこでの朝比奈の評価は、「成熟と完成」「飾らない人間のすばらしさ」「苦闘を超えた偉大な文化人」「面白くて立派な人間」という言葉によるものであり、朝比奈の「人生経験」と彼の奏でる音楽のすばらしさを結びつける形で評価が行われている。

「人間、年齢をとればだれしも体力、気力のおとろえや知的能力の低下を自覚させられる。だが、朝比奈隆にはこれがないようにみえる。彼も人間なのだから老化の自覚がないわけではないのだが、その演奏からは見識の豊かさ、寛容さ、理解力の深さなど「老年の稔り」のほうがあふれ出てくる。」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』1997：16)

「朝比奈氏の主要なレパートリーであるベートーヴェン、ブラームス、ブルックナーなどの交響曲は、近代ヒューマニズムの精神と不可分に結びついており、それを十全に理解して核心に迫ることは、人間というものを深く理解することにひとしい。これは豊富な人生経験を経てはじめて可能になるものであって、若輩のとうてい及ぶところではない。」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』1997：18)

ここで触れたような一種の「精神主義」ともいえるべき特徴は、朝比奈隆と彼を支持した聴衆に共通の認識として注目すべきものだと思う。冒頭で述べたように、80年に入ってから、朝比奈の活動は聴衆の間での注目が高まり、マスメディアにおける彼の登場回数も増加傾向にあった。そして90年代に入ってから彼のコンサートは連日満員であり、終演後も観客がいつまでも拍手を送り続ける光景は「朝比奈現象」とも呼ばれるほどになっている^{*8}。年を経るごとに彼の評価が高まってきたという事実も、「芸術表現は経験を重ねてこそ価値があるもの」という認識から表出されたものだったとすれば、それは「ごく当然のこと」ということにもなるのである。

2. 普遍概念化

朝比奈隆の活動をめぐるもうひとつの特徴には、「西洋芸術音楽そのもの」に対する認識が挙げられる。冒頭でも述べたように、彼のレパートリーの大半は、ベートーヴェンやブルックナー、ブラームスといった、ドイツとオーストリアの音楽家の作品によって占められている。その中でも彼は、とりわけベートーヴェンを神格化し、ベートーヴェンの交響曲を演奏する自らの姿勢を「巡礼」という言葉で表現した。

「神に対する巡礼と言う事は、神と一緒にいるところへは絶対に行けないわけです。」(響 前掲：167)

また彼は、「近頃の若い指揮者」がベートーヴェンのシンフォニーを全曲演奏しないことについて、「意味のないことだ」という考えを抱いていたようでもある(藤田1997：36)。さらに彼は、ブルックナーの音楽作品についても次のように述べている。

「私はブルックナーの音楽の美と真実性に傾倒し感銘している。それはイエスが人として尊敬されるにも似て、特定の宗教を超えた汎人間的なものとして共通であり、音楽とは本質的にそういうものと考えられる。」(朝比奈1978：173)

*8 95年7月30日に、毎日放送で放映された「大河は海へ」ほかで使用された言葉である。

朝比奈にとって、ベートーヴェンやブルックナーなどの芸術音楽を演奏する行為は、「神」への帰依にも似た、一種の精神体験だったようである。そしてその存在は「汎人間的」なものとして、すべての人類に等しく共有されなければならないものでもあった。

このような、西洋芸術音楽(なぜかドイツやオーストリアの音楽が中心なのだが)を「普遍的」なものとして認識する姿勢は、たとえば、朝比奈の演奏に対して一貫して高い評価を与えてきた*9、宇野功芳の次のような言説の中にも端的に表現されている。

「外国人の中には、いや日本人自身にも、ブルックナーはカトリックの精神から生まれ、それを通してのみ理解し得るし、演奏も可能である、と考えている人は多いが、その人たちは朝比奈＝大フィルの「第7」を何と聴き、本場の熱烈なブルックナー賛美者の言葉を何と読むのか。音楽に国境も宗教もありはしない。《分る人には分る、分らない人には分らない》。それだけだ*10。」

「朝比奈隆の指揮するブルックナー」は一般聴衆の間でも高い評価を受けてきた*11。筆者は、これまで、日本でブルックナーを愛好する聴衆の間に共有されてきた認識や理解についての調査を進めてきたが(北澤 前掲)、彼らの言説の中にも、西洋芸術音楽を「普遍化」して捉えるような認識が多く見受けられる。

「(ブルックナーの音楽の持つ)永遠性、普遍性はカトリック教徒のものではなく、人間すべてに通じるものである。」(『ブルックナー』No. 2, 1979: 14)

「優れた音楽作品は全人類の宝である。ことさらに垣根をつくる必要が、どこにあるのだろうか。」(『ブルックナー』No. 14, 1981: 10)

冒頭でも述べたように、朝比奈は、ベートーヴェンやブルックナー、ブラームスの交響曲を繰り返し演奏し、録音も行ってきた。そこではブルックナーのような60年代以前の日本のオーケストラでは、ほとんど演奏されることのなかった音楽作品を紹介し、認知させていったという功績を認めることもできる*12。しかし同時に、これらの音楽を愛好してきた多くの聴衆には、芸術音楽を極端に「神格化」し、「普遍的」な存在として認識してきたという特徴も見受けられる。

もし日本の西洋音楽受容のプロセスの中に、このような認識が共有されてきたとすれば、それは同時に、西洋音楽の「普遍概念化」へのプロセスになぞらえることもできるだろう。少なくとも、上で触れたような、朝比奈を支持してきた聴衆の間には確実に共有されてきた認識であると言ってよい。逆に言えば、こうした西洋音楽の「普遍概念化」が可能だったからこそ、朝比奈隆の演奏が支持されてきたとも言える。そして何より、朝比奈自身が芸術音楽の「普遍化」に尽力した張本人でもあったのである。

3. 教養主義

朝比奈隆の活動を支持した聴衆の間には、「教養主義」ともいうべき認識も共有されてきた。朝比奈は「ドイツ語の冗談」「英語の笑い話」「シェイクスピアの洒落」に渡るまで、様々な領域にわたる広範な知

*9 宇野の活動については、北澤(前掲: 32-33)。

*10 1975年に聖フローリアン協会でライブ録音された、ブルックナーの交響曲第7番のCD(VDC-1214)のライナーノート。

*11 「日本ブルックナー協会」の聴衆の多くは「朝比奈の指揮するブルックナー」を賞賛し、愛好していた。この協会の活動が日本におけるブルックナー受容のひとつの特徴を示していることは、北澤(前掲)全編を通しての主張である。

*12 60年以前の日本において、ブルックナーの作品の演奏はほとんど行われていなかった。根岸(1993)、北澤(前掲)参照。

識を有していたことで知られる(響 前掲:179)。こうした彼の知識の豊富さに対しては、多くの聴衆が「教養人」としての評価を与え、尊敬の眼差しを注いでいる。とりわけ作家や、著名人などのいわゆる「知識人」の間に、こうした傾向が見受けられるのは興味深い。たとえば、音楽評論家の出谷啓は次のように述べる。

「昔吉野の旅館で、『忠臣蔵』の話、ドイツの刑法と大岡裁きの違いなど、グラス片手に真面目に議論したのが懐かしい。指揮者の朝比奈隆が偉大なのは勿論だが、筆者にとっては大正デモクラシーで育った筋金入りのインテリとして、朝比奈ほど面白くて立派な人間はいない。」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』1997:40)

「音楽の知識や技能」だけではない、それ以外の「知識」をたくさんもっていることが「偉大な指揮者」である、という認識は、じつは朝比奈の活動を評価する際に頻繁に用いられる表現である。たとえば、朝比奈にとっての同業者でもある、指揮者の松尾葉子は、若杉弘との対話を振り返って次のように述べている。

「例えば、文学全集に、読んでないものがあるって言うわけですよ。『戦争と平和』は読んでけど『アンナ・カレーニナ』は知らないとか。ドストエフスキとか。そういうのが、君、欠けちゃうんだよねって。これはやっぱり読んどくべきなんだって若杉さんが。本当にそうだと思うんですよ。あと歴史ね、西洋史。それから倫理的なものと、経済学、思想史とか。全部関係してるんですもんね、それが日本って、音楽の部分しかやってない人が多いわけ。(中略)だから、朝比奈先生みたいなのが本当だと思うんですね、失礼な言い方になるかも知れませんが、本当の姿だって。偉大な指揮者の方には、そういう人間としての幅がありますよね。」(響 前掲:180-181)

朝比奈が、ここで挙げたような幅広い「教養」を身につけていた背景には、彼が音楽の知識や技能を習得してきた時代の社会的コンテクストが深く関わっている。

朝比奈隆が音楽活動を始めるきっかけとなった出来事として、関東大震災の際に避難してきた、早稲田高等学院に通う従兄が奏でるヴァイオリンの演奏を聞いたことが挙げられている(朝比奈1984:25-26)。その後朝比奈は旧制東京高等学校に入学するが、当時の東京高等学校は音楽教育に熱心であり(朝比奈 前掲26-27)、授業では弦楽四重奏でハイドンも演奏したという(朝比奈 1985:17-20)。その後京都帝国大学に入学した彼は、学生オーケストラで、ロシア系ユダヤ人の指揮者、エマヌエル・メッテルの指導の下、本格的に指揮者としての研鑽を積むことになる。明治・大正期のいわゆる「近代社会」においては、こうした学生オーケストラの活動は盛んであり、明治30年代にはすでに早稲田や慶応義塾において学生オーケストラの活動が開始されていたという指摘もある(岡田2000:118)。

また「近代社会」における西洋芸術音楽の中心的な受容層もまた、当時の大学生を中心とした、いわゆる「エリート」であった(岡田 前掲:118-122)。朝比奈は大正15年には、すでに日本青年館でメッテル指揮の新交響楽団の演奏を聴き、京大に入学する決意をしたという(朝比奈1984:32-33)。大正末期には、明治初期に比べれば演奏会に通う一般大衆の数が増えたとはいえ、当時の社会においてオーケストラの演奏会に通い、西洋音楽の演奏を聴く大衆の数は決して多くはなかったと推測される^{*13}。

メッテルに憧れて京大に入学した彼は、法学と哲学を学ぶと同時に、メッテルの弟子として、ヴァイオリンや和声学、指揮法などを習得するという、現在の音楽教育のシステムからは到底想像できないような環境の下で、さまざまな「教養」を身につけていった^{*14}。戦後、彼は関西交響楽団(現大阪フィルハーモニー交響楽団)を設立し、戦後の西洋音楽の普及に尽力するが、このことは彼が音楽学校出身ではなく、

*13 大正末期は、レコードの普及もあり、「クラシック音楽」の受容層が一般の音楽ファンにまで広がった時期である。しかしもちろん「金持ちが多かった」ことは容易に想像される。岡田(前掲:120-121)

*14 本論で扱った文献のほかにも、朝比奈隆ほか『朝比奈隆のすべて』現代芸術社、1995年や朝比奈隆『この響きの中に』実業之日本社、2002年など朝比奈の足跡について扱った文献は多い。

帝国大学出身の人脈をいかして、政財界からの協力が得られたことが大きく作用している^{*15}。

朝比奈のこうした足跡は、何も彼に特別の体験だったというわけではない。山田耕筰や近衛秀麿といった近代社会において西洋音楽の普及に熱心だった「エリート」について、朝比奈自身も言及しているように^{*16}、オーケストラに代表される、日本の「西洋音楽文化」の黎明期は、彼らのような人物によってこそ築かれてきたものである。

朝比奈の京大の後輩でもある、政治学者矢野暢は次のように述べている。

「時代が変わってしまった以上、朝比奈隆のような人間像を歴史が彫りあげることは、もう二度とありえないだろう。(中略)朝比奈氏がその一端を担ったクラシック音楽受容の過程は、まさに日本の「文明開化」の運びの質とテンポとを象徴する局面であった。(中略)朝比奈氏は、やはりその系譜に乗る典型的な人種のひとりであろう。ベートーヴェン、ブルックナーなどのドイツの正統音楽への入れ込み方は、<文明開化人>特有の正統志向、すなわち本場の中心線をたどろうとする好みを繁栄している。その点で、もし近代日本の音楽界が生んだ最たる<文明開化人>をひとりあげよというなら、日本歌曲に流れた山田耕筰よりも、私は朝比奈隆をあげるかもしれない。」(朝比奈1985:196-198)

近代日本社会における「音楽観形成」について明らかにすることは、今日にも続く、日本社会に特徴的な「西洋音楽観」を知る上での重要な手がかりを与えてくれることだろう。その中で、日本の西洋音楽受容のプロセスに深い関わりを持った、朝比奈の活動や彼を支持した聴衆に共有された認識に注目することは、けっして無益なことではないのである。

まとめ

以上、朝比奈隆や、彼の活動を支持した聴衆が共有した「西洋音楽観」について、「精神主義」「普遍概念化」「教養主義」という3つの視点からの考察を加えてみた。彼らの言説を読み解くかぎり、朝比奈が抱いた認識と聴衆の認識には、一定の共通性が認められるとあってよい。もちろん、その事実をもって「朝比奈隆と聴衆の音楽観が一致したから、多くの聴衆が朝比奈の活動を支持したのだ」などと主張したいわけではない。また、たしかに朝比奈の活動は、日本の西洋音楽受容のプロセスに不可分の関係を持っていたといえるが、ここで述べたような認識が、日本人に共有される、一般的な「西洋音楽観」であるという結論を導きたいわけでもない。

本論のめざすところは、文化の様相を「一般化」「単純化」して考えることではない。朝比奈隆という人物の生涯に渡る活動も、それを支持してきた聴衆の存在も、それぞれが共に日本の西洋音楽文化のコンテキストの中に置かれ、相互に作用し合あいながら、西洋音楽受容の一翼を担ってきた。そして、そのプロセスの中に現れた「認識」とは、たしかに日本社会が共有する「西洋音楽観」の一側面なのである。そして、それは本論の事例としても数多く採りあげた「マスメディアの形成」ともけっして無関係ではない。

もちろん、これが日本に特有の認識というわけでもなく、今後、海外の事例との比較などを通して、日本の「西洋音楽文化」の様相を明らかにしていくことが求められるだろう。

*15 彼の政財界との人脈について、朝比奈自身も、「仮に学校を出てすぐ音楽家になったり、あるいは音楽学校でも出ていたら、そういうつながりは皆無でしょうね。」と述べている朝比奈(1985:68)。藤田(前掲:29)も参照。

*16 近衛や山田の活動については、朝比奈(1985)に詳述されている。

引用文献

- 朝比奈隆『朝比奈隆 わが回想』中央公論社、1985年
- 朝比奈隆『楽は堂に満ちて』音楽之友社、2001年
- 岡田暁生「教養主義・根性主義・技術主義—近代日本の西洋音楽理解をめぐって」(青木保ほか編『ハイカルチャー』近代日本文化シリーズ、岩波書店、2000年 pp.115-133)
- 北澤隆明「日本におけるブルックナー受容—メディア社会と音楽の変容」広島大学大学院教育学研究科修士学位論文、2004年
- 小石忠男「朝比奈隆のベートーヴェンの魅力—半世紀をかけて追求したベートーヴェン様式の完成された姿」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』音楽之友社、1997年 pp.118-121)
- 響敏也『親父の背中にアンコールを』大阪書籍、1985年
- 藤田由之「日本の楽団を築きあげた指揮者 朝比奈隆」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』音楽之友社、1997年 pp.22-37)
- 根岸一美・渡辺裕『ブルックナー／マーラー事典』東京書籍、1993年
- 『私の履歴書 文化人13』日本経済新聞社、1984年 pp.7-88

参考資料

- 宮岡博英編「朝比奈隆 ディスコグラフィ—」(『朝比奈隆 栄光の軌跡』音楽之友社、1997年 pp.73-116)
- 下田友彦編「朝比奈隆 ディスコグラフィ—(前編)」(『レコード芸術』音楽之友社、2002年3月 pp.77-86)
- 下田友彦編「朝比奈隆 ディスコグラフィ—(後編)」(『レコード芸術』音楽之友社、2002年4月 pp.70-82)
- 『ブルックナー』No.1～34 日本ブルックナー協会、1978-1997年